

**【一般演題2】 第7席 『医心方』を骨子としての『明堂経類成』の復元の試み**

愛媛 山見 宝 愛媛 光藤 英彦

今日、穴位主治症の伝承を整理することは鍼灸の臨床研究の土台として必須の作業である。勿論、諸先輩が既にこれに取り組み一定の成果をあげておられるところでもある。我々もこれまで伝承諸文献の相互比較に基づいて穴位主治症の伝承の整理を行おうとして来た。

まず、第1段階としては『甲乙経』と『外台秘要』の条文を比較検討した。『甲乙経』と『外台秘要』の穴位主治条文は相互に類似しており、共通の源流をもつことが推測され、それは『甲乙経』の序文に記述されている『明堂孔穴鍼灸治要』又はそれに類した明堂経であったと考えられるが、『外台秘要』は全体一連の複合条文として記述されており、『甲乙経』は一部単位条文化されて複数の条文に区切られていることが明らかになった。『甲乙経』において試みられた単位条文化作業は、鍼灸の原体験を明確にするために更に押し進めるべき課題であると考えられた。なお、第2段階としては『甲乙』・『外台』・『類成』・『医心方』の相互比較を行い、『医心方』の位置づけを検討した。その結果、『医心方』は『類成』からの完全なる抜粋であることが明らかにされた。また『医心方』条文の抜粋の方法を検討することにより明堂条文の単位条文化が更に押し進められる可能性の有ることを見出すことができた。

この結果を踏まえて第3段階として、『医心方』を骨子としての『類成』の復元の試みを行うこととした。今回は、『医心方』を骨子として『甲乙』・『外台』を参照して『類成』の復元を行い、これと実際に残存する『類成』自身と比較して復元のレベルについて検討を加えた。